

トマトキバガのフェロモントラップへの誘殺数が増加しています。 トマト圃場等への飛び込みや発生に注意しましょう。

トマトキバガは、主にナス科作物を好み、トマト等を食害する侵入害虫です。国内では、令和 3 年に熊本県で初めて発生が確認され、令和 6 年 12 月までに全都道府県において確認されています。

茨城県では、県内 4 地点に設置したフェロモントラップにおいて、令和 5 年 10 月に初めてトマトキバガ成虫の誘殺を確認しました。現在のところ、トマトキバガによる農作物の被害は確認されていませんが、今後、圃場内での発生に十分注意してください。

なお、他県では、冬期間でも施設内での発生が継続的に確認されていますので、今後も施設内への飛び込みや発生に注意しましょう。

[県内での発生状況]

直近 1 か月間（9 月 16 日～10 月 15 日）の県内 4 地点に設置したフェロモントラップへのトマトキバガ成虫の総誘殺数は、163 頭（土浦市 12 頭、龍ヶ崎市 33 頭、筑西市 40 頭、鉾田市 78 頭）で、過去 2 か年の同時期までの総誘殺数（令和 5 年：3 頭、令和 6 年：77 頭）よりも多くなっている。

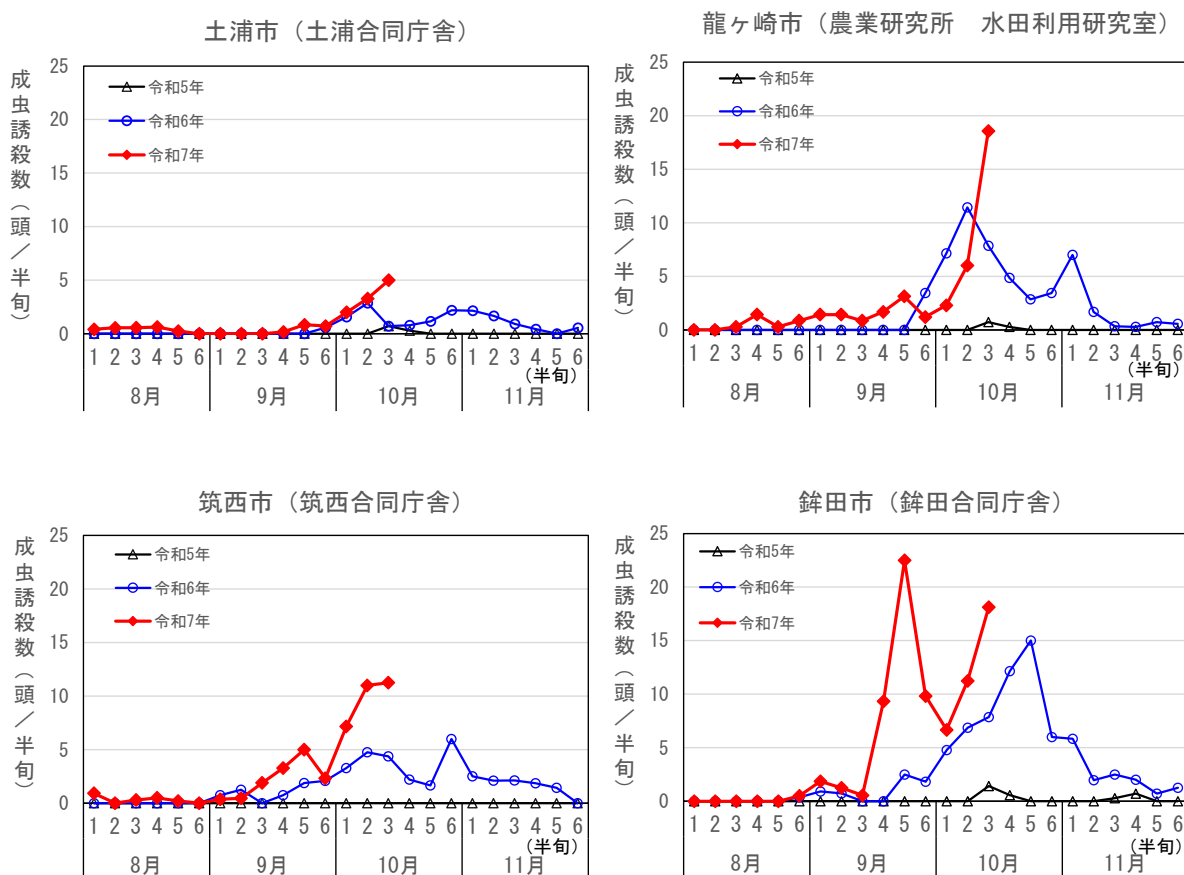


図 フェロモントラップへのトマトキバガ雄成虫の誘殺状況

〔トマトでの被害の特徴〕

- ① 茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の被害は、ハモグリバエ類の食害痕と類似するが、ハモグリバエ類は線状に痕を残すのに対し、トマトキバガは面的に食害する。トマトキバガの食害部分は表面のみを残した薄皮の袋状になり、葉の裏面からでも透けて見える（写真1）。
- ② 果実では、幼虫が食入して内部を加害し、数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分が腐敗する（写真2）。

〔トマトキバガの形態の特徴〕

- ① 成虫は、翅を閉じた静止時で体長5～7mm（前翅長約5mm、開張約10mm）。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在する。後翅は一様に淡黒褐色で、翅頂下でえぐれる（写真3）。
- ② 終齢幼虫は、体長約8mm、体色は淡緑色～淡赤色で、頭部は淡褐色である。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある（写真3）。

〔防除対策〕

- ① 施設栽培では、開口部に目合い0.8mm以下の防虫ネットを設置し、施設内への侵入を防ぐ。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ② 圃場をよく観察し、初期の被害を見逃さないようにする。トマトキバガの発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターまたは病害虫防除所に連絡する。
- ③ 被害葉や被害果は、圃場から持ち出し、野外に放置せずに、ビニル袋に入れて一定期間密閉して成幼虫を死滅させるなど、適切に処分する。
- ④ トマト、ミニトマト圃場で発生が認められた場合は、発生を拡大させないため、薬剤散布を行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 令和7年10月15日現在、トマトキバガに対して登録のある農薬の適用作物はトマト、ミニトマトのみである。薬剤防除にあたっては、最新の農薬登録情報を確認する。
（農林水産省「農薬登録情報提供システム」<https://pesticide.maff.go.jp/>）



写真1 トマトキバガ幼虫によるトマト被害葉



写真2 トマトキバガ幼虫によるトマト果実の食害



後翅のえぐれ



黒色横帯

写真3 トマトキバガ成虫（左・中）と終齢幼虫（右）

（写真は農林水産省植物防疫所原図）